

聖書：ルカの福音書12章22～34節

説教題：神の国を求めなさい

1 キリスト教と仏教

何日前ですがラジオで、仏教の僧侶という方がお話ししているのを聞く機会がありました。番組の担当者が「年末はどのような気持ちで過ごしたらよいのでしょうか」と質問したら、僧侶の方はこう答えていました。「皆さん一年間、いろいろあったことでしょう。一年の終わりはそのさまざまな縁を切っていくことが大切です。そうして新たな気持ちで新しい一年を迎えてください。」仏教では、一年の終わりに悪い縁を断ち切り、自分をしあわせにしてくれる良い縁と巡り会っていくと考えるらしいのです。悪いことがあればそれはたまたま運がなかったということになり、良いことがあっても、それもいつ失ってしまうかわからない。この世を無常ととらえる仏教の考え方です。人間の幸せというもののは風が吹くようなものでわからないとあきらめているように思います。

その点、キリスト教は仏教と異なります。神は私たちを幸せにするために、そこまでするのですかと驚くほどのことをしてくださっている。意外な表現かもしれませんが、あえてわかりやすく言えば、「私たちが幸せになるしかない。神はそうようにされる方である。」そのようにさえ言うことができます。

でも現実を見るならそうとは思えません。いつも幸せというわけではありません。ときには苦しみを味わいます。ときには出口が見えないような悩みの中に放り込まれることもあります。神は私たちを愛して下さること

を頭では理解できても、目の前にあるものを見ればどうしても神の愛を実感することが難しいときがあります。神は本当におられるのか。神がおられるのならどうしてこの不公平な現実をそのままにしておられるのか。そんな疑問を感じてしまうことがあります。

2 神の国を求めるなら

(1) そうすればこれらのことは...

なぜ私たちは幸せになることが難しいのでしょうか。聖書は、私たちが罪を犯したために、神が造られた世界が汚されてしまいました。そのとき神はこう言われました。「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。」(創世記3章17節後半) その日以来、私たちは幸せになることは難しくなり苦しむものになったと書かれています。

神はそんな私たちをご覧になり、どうされるのでしょうか。おまえは罪を犯したのだから、その罪を償うために、一生苦しみなさいと冷たく突き放したのでしょうか。そうではありません。神はあきらめていないのです。私たちが幸せになるために、神は様々な手立てをされます。

31節。「何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。」私たちが幸せになるために、神の国を求めなさいと言うのです。

この文章は少しわかりにくいところがあ

ります。「これらの物」とは何か。「それに加えて」の「それ」とは何か。前後の文章から推測すると、「これらの物」とは、食べる物とか飲む物、あるいは着る物ということです。父なる神は、私たちのからだのためにどうしても必要な物を知って下さっていると言います。「それに加えて」の「それ」は神の国を指します。

31節を言い直すとこうなります。「あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、神の国は与えられ、それと同時に食べる物、飲む物、着る物いっさいも与えられます。」

直接にはそのような意味になります。みなさんも、そのような意味としてこの箇所を覚えておられたはずです。

(2) 「いのちを延ばす」と「加えて与えられる」

でもそれだけではありません。実はもう一つの大切な意味が込められています。

32節の「それに加えて与えられる」の「加えて」ということばと、25節の「自分のいのちを少しでも延ばすことができますか」の「延ばす」が同じことばなのです。短い文章の中で、同じことばを二度繰り返すことには、何か大きな意味があると考えるのが普通です。イエスは、意識して同じことばを繰り返していると思われます。

そうしますと31節はこうも訳すことができます。「あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、あなたがたのいのちは増し加えられます。」

これに関連することですが、26節には不思議なことばがあります。「こんな小さなことさえないで、なぜ他のことまで心配するのですか。」「こんな小さなこと」と言われ

ているのは何か。自分のいのちを延ばすこと。神にとって、私たちのいのちを増し加え、延ばすことが、難しいことではない。いや、神にとって、私たちに永遠のいのちを与えることは、非常に小さなことである。取るに足りないことというのではなく、どんなことがあっても喜んで私たちに与えたいという意味です。神に国を求めたならば、あなたがたには食べ物や飲む物、着る物が与えられますというような単純な意味ではありません。神の国を求めるならば、いのちが与えられるのだと言っているのです。

3 神の国を求めるとは

(1) 極端な例

それはうれしい話です。しかし問題が一つあります。「まず神の国を求めなさい。」みなさんは、これまでこのみことばを何度も聞いてきたでしょう。クリスチャンは、何をさておいてもまず「神の国を求めなければならぬ」、ということは知っています。しかし、神の国を求めるとは具体的に何をすることなのか、考えたことがあるでしょうか。意外にあいまいなままではないか。

ひとつの極端な考え方としてこんなものがあります。何を食べるか何を飲むか何を着るか、そのようなことは全部心の中から捨てて、いつも神の国のことだけを考えるべきだ。そういうことでしょうか。

一例を挙げましょう。すでに多くの方が知っている話ですので、実名を挙げます。藤野教会の小林先生は上沼先生と大学時代聖書研究会でいっしょだったそうです。小林先生が自分の部屋でクラシック音楽を聴いていたら、そこへたまたま上沼先生がやってきてこう言ったのだそうです。「小林君。君は

キリスト以外に慰めがあると思っているのか。」つまり、クリスチャンが音楽を聴いて楽しむなどとんでもない。そういう意味で言ったのだそうです。今こんな話を聞くと、ずいぶん驚くでしょう。でもおそらく当時の教会では、べつに珍しくない考え方だったのだらうと思います。さすがに今は、このようなことを言う方はほとんどいなくなりました。

(2) パリサイ人のパン種

今、極端な例を挙げました。では31節を本当はどう理解すればよいのでしょうか。私たちがクリスチャンとして歩むための大事な柱です。非常に大切なことです。一年の最後の礼拝ですので、折角ですからきょうはそのことを覚えて帰っていただければと思います。

私は、北海道聖書学院で聖書の読み方について教えています。聖書を読むいくつかの原則があります。その中の一つに文脈をとらえて読むという原則があります。聖書を細切れに、一節だけ取り出してそれだけを読んでも、正しい意味はとらえることができません。言われてみれば、非常に当たり前のことです。

この箇所はこの原則を当てはめます。31節がどんな流れの中で語られているか。まず前の方を見ます。もとをたどれば、12章1節にたどり着きます。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです。」それに続いて、雀のこととか、聖霊のこととか、遺産相続のこととか、一見関係のないことが並べられているように見えますが、実は全部つながっていて、すべてはいのちのことと関係して話が續いています。

神の国はどんなところですか。神の義と公

正が支配しているところ。嘘偽りは一つもありません。そのような神の国を求めなさいと言われていました。

文脈を調べるという原則。今度は後の流れを見ます。33節。「持ち物を売って、施しをなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。」神の国を求める、その具体的な例としてこうしなさいと言われていました。

今31節までの流れと、31節の後の箇所を見ました。この二つをつなげればこうなります。あなたは自分の持ち物をすべて売って、施しができるか。そのようにして天に宝を積むことができるのか。そのようなことが問われます。

がんばればできるのでしょうか。でも神は徹底的に求める方です。神の前に自分を偽ることは許されません。そうしますと私たちにできる事はこういうことになります。「私は自分の持ち物を売って施しをすることはできません。そんなことよりも、おいしい食べ物をみるとどうしても食べたくなります。きれいな服を見てしまうと、どうしても欲しくなります。おなじことを何度も繰り返します。止めることができません。欲望を捨てることができません。神よ。私はこんなあわれな者です。助けてください。自分は神の国に入ることなどできない汚れた罪人です。」

神の国を求めなさいと言われていました。どんな人が神の国を求めるのでしょうか。私こそ神の国にふさわしいと思っている人ですか。いいえ、そのような人はもう満足していますから、神の国を心から求めることはありません。

ではだれが神の国を求めるのか。

神の国に入れないと悲しむ者ではないで

すか。入れないと感じるからこそ、心から神の国にあこがれるのではありませんか。罪にあふれ、悪と偽りがあふれるこの世界を見て悲しむからこそ、神の国が来ることを切実に求めるのではないですか。

(3) 主がしてくださること

そのような願いに神はどのようにして応えるのでしょうか。

主は、ご自分の持ち物を売って施しはしませんでした。その代わりに、この方は、ご自分の弟子であったユダの手によって売られました。ご自分のからだを、貧しい者たちのために完全にあますところなく施しました。十字架において、そのからだは裂かれ、この方は死なれなしましたが、墓からよみがえられ、朽ちない宝を天に積み上げてくださいました。28 節の「ましてあなたがたには、どんなによくしてくださるでしょう」のみことばはこのようにして成就していきました。父なる神が与えてくださる神の御国は、主イエス・キリストのからだを通して与えられています。

この約束を信じて、また来年もともに歩んでまいります。